

# 多次元に折り重なる音

柊悠司

もうそろそろ寒くなってくる11月の半ば、1ヶ月ぶりに降り立った大阪の街。柊悠司は、先月の祖父の一回忌で関東から帰省したが、その翌月も大阪に来ることになるとは思ってもみなかった。

「それにしても、徹夜になるとは聞いてなかったな。まさか、客先で停電復帰まで待機とは。」昨日から何度この言葉を吐いたか。客先で深夜の作業になることはわかっていたが、作業自体は2時間程度なので、さっさと終わらせてホテルなりインターネット喫茶なりで、始発まで待つつもりだったのだ。文句を言ったところで状況は変わらないが、わかっているのに独り言をつぶやく。それが彼のささやか過ぎる抵抗だった。

大阪を離れてから4年近くになるが、24年間育った街である。彼は迷うことなく、客先の大阪スカイビルに向かう。

「スカイビルか。まりさん、元気かな」

以前自分からふった学生時代に付き合っていた恋人とのクリスマスデート場所に、仕事で訪問することになるとは思ってもみなかった。もっともお互いすでに別々の相手と結婚しているのだが。

スカイビルに着くと、すでにクリスマスのイルミネーションや出店が立ち並んでいた。そして周囲はカップルばかり。独りであることが全然気にならないと言えば嘘になるが、仕事という大義名分がある。イルミネーションのアーチをくぐると、Twitterで呟きをツイートしたのち、先に待機しているであろうCEに電話するべく、ケータイを取り出す。

「やれやれ、今夜は長くなりそうだ。」

そうつぶやくと、彼はCEのケータイに電話をかけた。

現場のCEと落ち合い、悠司は17階のマシナールームに通された。もうすぐ12月になろうというのに、冷房と冷却用扇風機がフルパワーで稼働している。普段なら数十台あるサーバ達のファンの音が耳につくが、23時に外を歩かされて冷えた身体には、室温の低さのほうが身に応えた。

「これじゃ、外の気温と変わらないな。」

「え？何か言いましたか？」とCEが声をかけてくる。

「いえ、なんでもありませんよ」とだけ返し、悠司は手早く作業道具を広げ始めた。冬のマシナールームで、スーツの上着を脱いでカッターシャツで仕事をするCEに、寒さの話をして無駄だろう。

悠司が作業道具を広げ終わろうとすると、CEがシステムボードをサーバから引き抜いて持ってきた。

「それじゃ、この2枚をお願いしますね。終わったから声を掛けてください。それまで別の仕事をしてますので。」

そう言って、CEはどこかへ行ってしまった。悠司は、身体が芯から冷えないうちに終わるべく、作業に取り掛かった。